みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

民族問題の解決に向けて：トマス・ヘーバラー報告と都時遠報告に対するコメント

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 佐々木, 信彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00001715

民族問題の解決に向けて

トマス・ヘーバラー報告と郝時遠報告に対するコメント

佐々木　信彰

最初に

トマス・ヘーバラー教授と郝時遠教授のきわめて明解にして内容の深い報告に接することができ，大変うれしく，また大きな啓発を受けた。

両教授の報告は長年の研究にもとづく成果の一端を披露したものだが，民族にとっての文化の重要性を強調する点では共通しながらも，現実認識については相違点があったのではないかと思う。つまりヘーバラー教授が現実に対してやや悲観的であったのに対し，郝教授は楽観的であったと思う。いずれにせよ東西冷戦の終焉後，今日の世界における困難で複雑な民族問題の状況を念頭におきながら，二人の報告を拝聴できたことは大変タイムリーかつ有意義であった。

まず各報告に対して簡単なコメントを加えたあと，いくつかの問題点を提起したいと思う。

トマス・ヘーベラー論文

ヘーバラー教授の報告の重要なポイントのひとつは「近代化の進展により同質化すべきはずの民族間差異は，現実には80年代後半からの民族回帰とエスニシティの世界的な高揚により裏切られた」という点にあると思う。

中国の経済的・社会的変化のプロセスにおける対立の主要な要因を複眼的アプローチで考察する中で，集団的記憶，政治的対立と経済的対立，文化的対立にふれたが，私には問題を複眼的にとらえながら問題の所在を明らかにし，解決の方法を提示する教授の方法はたいへんわかりやすく賛同できる。

ヘーベラー教授は最後に民族対立の緩和についての提案の中で連邦制に言及した。連邦制はひとつの理想的な考えとしては理解できるが，現実の問題として，中国で連邦制を確立することは現在もそして将来も大変困難なことではないだろうか。

なぜかと言えば，1980年代後半におけるソ連邦の崩壊過程を中国政府は反面教師として学習しているはずだからである。むしろ1984年に制定され今日まで10年余り民族政策の拠り所となった「民族区域自治法」をいかに今日の状況——すなわち国内的には制定当時，計画経済体制であったが，いまや市場経済体制に転換しつつあること，また国際的にはこの間，東西冷戦終焉，社会主義体制の崩壊，世界各地における民族主義の噴

出があること——に合致するよう修正していくかが，教授もふれられたように現実的であり，緊急な問題ではないか（佐々木 1995）。

郝時遠論文

郝時遠教授の報告は今日の中国における近代化過程にある少数民族の文化に焦点をあてたものであったと思う。教授は「東西冷戦の終束後の世界で開放・発展が共通認識になっており，国際間，民族間の共通性がますます多くなり，とりわけ経済面でその傾向が強いが，このことは各民族の文化的多様性の消失を意味しない。というのは民族文化の統合過程は経済生活の均質化より複雑かつ緩慢なものであるから」と説明した。私も教授のこのような考え方に賛成するが，以下いくつかの点につき問題を提起させていただきたい。

第一に，経済発展の結果，各民族の経済発展の水準が均一化し，経済生活が融合するという教授の論点は中国の少数民族の経済発展状況をみた場合あまりに楽観的にすぎないか。私は現代中国の中に世界でいう南北問題——民族問題と経済的格差問題の重なり——が存在することを主張してきたが（佐々木 1988），1979 年の対外開放，経済改革政策の実施以降の 15 年余りはこの南北問題——東部沿海先進漢族地域と中・西部内陸後進少数民族地域間の経済格差——は一層拡大しており，むしろ事態は「経済生活の不融合が少数民族の凝集をもたらしている」のではないかとさえ思える。教授はどう考えるであろうか。

第二に，同様に経済的ナショナリズムの溶解，東アジアの途上国における非西洋的現代化という教授の考えについても，一面ではその側面が認められながらも，他面では経済の地域ブロック化傾向，主要国間の経済摩擦など現実を直視すると「簡単に溶解しない経済ナショナリズムの頑強性」を思い知らされるのではないか。また開放型東アジア発展の現実は，資本・技術の両面において外国資本（とりわけ多国籍企業）の強い影響があり，「東アジア独自の現代化モデルの提示」には私には現実を認識すると，とても楽観的ではありえないと思われる（佐々木 1997）。

第三に，「民族は形成・発展・融合をへて最終的には消滅する」という中国の考え方についてであるが，世界の民族はいま発展段階にあり——そうだからこそ民族主義のマイナス面も含みながら民族紛争が噴出している——なぜ遠い未来の融合・消滅をいまの時点で言及するのかという疑問がある。

最後に

いずれにしても，今日の民族問題を認識し，また民族紛争の克服を考える場合に，多民族国家中国のケースは大変重要な研究対象であることは間違いないと思う。私は二重

の意味で重要であると思う。多民族国家の中で，主要民族である漢族は他の少数民族とどのように関わってきたのか，その歴史的経験から教訓を汲み取ることがひとつ，他方漢族を初めとする中国人は長い歴史期間において東南アジアを中心に世界的規模で華僑，華人を形成し，彼らの居住国では少数民族としての歴史的経験を積んだのであり，そこからの教訓を得ていること，この二つの歴史的経験と教訓を突き合わせ，学ぶことが世界の民族紛争の解決に重要であることを強調したいと思う（可児・国分・鈴木・関根 1998）。

参考文献

可児弘明・国分良成・鈴木正崇・関根政美編著
1998 『民族で読む中国』朝日選書 595，朝日新聞社。
佐々木信彰
1988 『多民族国家中国の基礎構造——もうひとつの南北問題』世界思想社。
1995 「中国の民族区域自治」『アジア諸国の地方制度（Ⅳ）』地方自治協会。
佐々木信彰編著
1997 『現代中国経済の分析』世界思想社。